

ば我友のうちに、家なきを悲しふるものあり、是に家を賜らば、なほ吾に賜はるがごとくならんと、まをし、ほどに、即甲斐國山梨郡の地に、金を添て賜りぬ、やがて其ものを呼てとらせ、其身はまた薬を賣て、行へ玄らずなりぬ、彼地は徳本屋敷とて、今も殘れりとぞ、

〔長崎夜話草四〕長崎清民一人

寛永の頃、大村町に布屋了心といふ者ありし、本泉州の産にて、壯年長崎に來りて居住す、本より妻もなく子もなし、もろこし船より、もて渡る沈香を商ふ事を、恒の産とす、唐土人の知たるがあたりありて、年ごとに持來るを買とり、品を分ち撰び賣て、その利を得て生計となせり、ある時、沈香一籠を買とり、もてかへりひらきみしに、沈の中に、奇楠の一木、難りてありしを見出つゝ、おどろきていそぎそのぬしなる唐人にかへしたりければ、甚だ悦び感じて、日本の賢人なりと敬ひ貴とびたりとかや、○中一とせ入津せし船の旅館と頼みなんとて、船主より了心が名を公けへ書付、さし上侍りしかば、やがて布屋了心とてめし出され、船主の願ひの如く、汝を旅館に免許あらべしとおほせごとありし、其頃長崎に來れるもろこし船は、いづれも因みに玄たがひ、商家を旅舎と定めありて、その荷物悉く宿のあるじのまかなひにて、徳を得る事山の如くにて、一夜がほどにも、富る身と成ことなれば、神にいのり、佛にねがひても、誰かは是を有難しと受ざらん、かかるに此了心官長のおほせに答ていはく、我身本より妻子なく、沈を商ふをもて、衣食豊かにして、心常に安樂なり、此外世に何の望みなし、一婢一僕ありて、身體の勞を助けて、家内常に静か也、何ぞ異國の客を宿するの苦をせんと、かたく辭して、つひに退きぬ、此ひとつをもて、餘の有さまおしはかるべし、

〔閑散餘錄附錄〕東厓先生、○藤伊二條街ニテ、藥ノ囊ノ落タルヲ、ツレシ書生ニ拾ハシム、内ヲミレバ、方金數枚アリ、先生眉ヲシワメ、○中シノマ、神ダナニ置テ、其年ノ暮ニ、伊勢ノ御師ノ來レルニ